

センター後継、英検「従来型」は不合格 「新型」は認定

増谷文生 2018年3月26日17時34分

2020年度から始まる「大学入学共通テスト」をめぐり、大学入試センターは26日、昨年実施した試行調査の記述式問題の採点結果と、英語で使われる民間試験の審査結果を公表した。国語と数学で出題された記述式問題は大半で正答率が低く、数学では約半数の受験生が無解答だった。また、民間試験は7団体が申請した8種の試験が合格したが、高校などに最も普及している英検は現行の「従来型」が不合格となり、1回の試験で英語の4技能を測定する「新型」のみが認定された。

試行調査は昨年11月に実施され、記述式問題が3問ずつ出された国語は約6・5万人、数学は約5・4万人の高2と高3が受けた。国語で正答条件をすべて満たす「完全正答」の割合は43・7%、73・5%、0・7%と問題によって大きく異なり、複数の資料を把握し、対立点を整理して80～120字でまとめる問題で最も低かった。数学は正答率が2・0%、4・7%、8・4%と全問が1割未満で、無解答率が46・5～57・0%だった。

記述式問題の採点は業者に委託し、約1千人で行った結果、10日間で終わったという。ただ、センターが一部の答案を抽出して確認したところ、問題によって0・8～23・8%で採点の疑問点が見つかり、問題作成者や業者に確認した。確認の結果、一部の採点基準をより明確にし、全体の約0・2%の答案で採点結果が補正された。

センターは、試行調査を受けた高校生の自己採点と実際の採点結果も比較した。国語では問題によって受験生の21・2～30・5%の自己採点が採点結果と一致せず、数学でも4・0～10・6%が不一致だった。

一方、英語の4技能を測る民間試験では7団体が申請した10種の試験のうち、8種が合格した。ただ、「読む・聞く・書く」の3技能を1次試験で測り、合格者が「話す」の2次試験に進む従来型の英検は、「1回の試験で4技能全てを評価する」という要件を満たさず、不合格となった。日本英語検定協会は1回の試験で4技能を測る試験も計3種類申請しており、これらは合格したが、従来型英検のように多数の高校を受験会場にできるかは分からないという。

このほか、ケンブリッジ大学英語検定機構の「リングスキル」は国内の試験実績がないため不認定となり、「IDP:IELTS Australia」の「IELTS (アイエルト)」は今年6月まで試験を続け、「国内での実績が2年」という条件を満たせば認められることになった。(増谷文生)

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.